

小さな平和の作り方

松田昂大

ラマダンが終わると、シンガポールではハリラヤというお祝いの日がやってくる。その日は毎年、父の同僚のイスラム教徒の方の家で行われるオープンハウスに招かれる。オープンハウスは、家族や友人だけでなく、近所の人や同僚を自宅に招いて食事や会話を楽しむ習慣だそうだ。

家を訪ねると、部屋は色鮮やかな飾りで彩られ、見たこともない伝統菓子やたくさんの料理が並んでいた。しかし僕がそれ以上に驚いたのは、民族衣装のバジウムラフを着ている同僚のおじさん、ヒジャブをかぶった人おばさん、Tシャツ姿のお兄さん、民族も年齢も様々な人たちがいたが、皆が同じテーブルで笑いながら食事をしていたことだった。日本にいた頃には、外国人を見ただけで「外国人だ!」と珍しがっていたので、様々な国や文化の人が何の違和感もなく同じテーブルを囲む光景は新鮮だった。お互いの違いを特別扱いするのではなく、「当たり前」として受け入れる。それこそが、平和な姿なのかもしれないと思った。

オープンハウスで振舞われたマレー料理も好きだったが、僕が一番好きな食べ物は刺身だ。生の魚を食べることは、日本では一般的だが、外国では生のものを食べることに抵抗を感じる人も多い。最初は「おいしいのにもったいない。」と思っていた。しかし、日本人全員が刺身を好きなわけでもないし、僕の嗜好がすべての人に当てはまるわけではない。また、僕は豚骨ラーメンも好きだ。少し独特なおいと、とろみのあるスープが気に入っている。しかし、世界には宗教上の理由で豚を食べられない人もいる。彼らが「食べてみたい」と思っても、それはできない。これは嗜好の問題ではなく、信仰に関わる深い理由だ。だからこそ「食べられない理由がある」という事実を、そのまま受け入れる必要がある。

これらの僕にとっては大好きな食べ物は、様々な理由で受け入れられない人がいる。それは「相手がおかしい」のではなく、「違う背景を持っている」からだ。そう気づいてから、僕は自分の考えや好みを押し付けるのではなく、違うことそのものを尊重するようになった。

オープンハウスで見た、民族や宗教をこえて笑いあう光景。そこには違いを当たり前として受け入れる空気があった。僕もこれから友達や家族と関わりの中で、その空気を大切にしていきたい。互いの文化や嗜好を個人レベルで受け入れること。それが僕にできる小さな平和への一歩だと思う。